

## 彙報

昭和五十九年十月二十日、東海大学湘南校舎11号館に於いて、第三回東海大学文明研究会大会と総会とが開催された。総会では、昭和五十八年度の決算と昭和五十九年度の予算案とが承認された。その他、本会の会務報告が行われ、研究会のあり方をめぐって活発な討論がかわされた。

### 昭和五十九年度

#### 第三回東海大学文明研究会大会

講演

『科学哲学の方法』 筑波大学教授 沢口昭幸

研究発表

『最初期ギリシヤ思想に見られる METEORON 観について』

本学大学院生 平野陽一

『ビートルズの負債契約労働者 (Bonded Labour) について』

本学大学院生 小山義則

『日本古代の罪觀念について』 本学大学院生 田崎篤朗

### 昭和五十八年度第一回東海大学

#### 秀作卒業論文発表会

論題

『天道と運』 本学日本課程卒業生 渡辺慎司

『北宋末期に於ける方臘の乱と両浙路周辺の茶塩賊との関連について』 本学東アジア課程卒業生 高瀬順子

『現代ソ連邦中央アジアにおけるムスリム』 本学西アジア課程卒業生 渡辺秀子

『クマン族がハンガリー史に与えた影響について』 本学東欧課程卒業生 佐藤明子

『ホップスの国家論についての考察』 本学西欧課程卒業生 原守

### 昭和五十八年度

#### 東海大学文明研究会例会

一月例会(一月二十五日)

『撰関時代における怨霊の様相』 本学大学院生 池上正二

### 昭和五十九年度

#### 東海大学文明研究会例会

四月例会(四月二十四日)

『時間とのかかわり』 本学大学院生 浅見 聡

『銅鐸の用途について』 本学大学院生 今井 久

五月例会(五月二十五日)

『アルブレヒト・デュラーの芸術』 本学大学院生 石原綱

成

『ロココ文化とその時代』 本学大学院生 黒岩誠司

十一月例会(十一月二十九日)

『最澄の時代意識』本学大学院生 中野雅之

『Dunbaron Oaks research library をめぐって——アメリカ

学術研究事情——』本学教授 松本富士男

十二月例会(十二月十四日)

『文明への Essayer……フーコーの歴史理論をめぐって』 本

学大学院生 吉村 弘

『デカルトの幼年時代』 本学助教授 石井忠厚

昭和五十九年度

東海大学大学院文学研究科文明研究専攻修士

論文題目

八代 和雄 『都市社会とサティー』

浅見 聡 『時間とのかかわり』

黒岩 誠司 『フランス十八世紀におけるロココ文化』

平野 陽一 『初期ギリシヤ倫理思想における METORON 及

び KAIROS 観について』

昭和五十九年度 文学科卒業論文題目

文明日本課程

青山 茂 「新編相模国風土記稿」による——江戸時代の相模

国の市場——

石井 伸房 安部磯雄と学生野球

石川 司郎 阿波藍

井上 靖人 相模大山——講組織と街道——

入嶋由紀夫 鎌倉の切通し

大塚 博之 吉田松陰の「道」観

大森 幸喜 漁村生活の変遷——熱海市網代の事例研究——

岡村 光恵 産に対するケガレ観とその変遷

樗野 英樹 コカ・コーラと日本

金子 久光 新潟砂丘における農業展開

香山 洋人 古事記に於けるクニツカミ

川原 整 ルース・ベネディクトの文化観

倉田 安里 三輪山の歌と近江遷都

小石 浩貴 現代日本の母子無理心中

斎藤 重信 高度成長期の新潟港の機能変化

坂詰 弘子 平安時代の御産

坂本 優 横島干拓と農業

澤田麻理子 女性の自伝研究——女性が自伝を書く動機——

繁永 京司 長谷川如是閑の日本人論の一考察

志村 幸子 鹿鳴館時代と洋装——洋服の色彩感覚を中心に——

鈴木 章子 荒川の改修に伴う水害形態の推移

鈴木 茂雄 幼小時代の福澤諭吉

鈴木 裕樹 江戸古地図にみる文京区域の発展

高橋 伸治 千葉氏と妙見信仰

武田 泉 近郊開拓地の都市化による変容——公団住宅進出による大八洲開拓の一部移転を事例として——

田宮 悟 夏目漱石の職業観

中村 孝志 古事記における善・悪の観念

西阪 雅司 近江商人と木地師にみられる客民性——アイデンティティの探求——

長谷川真史 伊勢型紙と絵師

樋口 俊成 甲斐の和紙

廣吉 賢史 円仁の入唐求法巡禮行記について

藤倉 弘士 秦野地方の葬送儀礼

増渕 博行 軍都計画時代の相模原における軍事施設の進出と農地との関係——陸軍士官学校用地買収に関する研究——

村田由紀子 向原遺跡

初山喜代美 方形周溝墓と葬送儀礼

八重畑 亨 風刺画家ビゴ

山室 康雄 『東錦絵の流行』——人物絵から風景画への移行——

大森信太郎 河童と水神信仰

関 政嗣 「時」の観念

天内 琢磨 イタコに関与するオシラサマ信仰にみる津軽のシャーマニズムの考察

加谷 直己 戦後の月賦販売

鈴木 剛 ラフカディオ・ハーンの見た日本人の顔

瀧澤 浩 平田篤胤の『本教外篇』の一考察

西田 好広 外食産業と食材の展開

阿部 達也 前期幕領期における蝦夷地久寿里場所

石川 浩平 遠藤周作の作品に見る「運命への連帯」

今泉 明子 孟蘭盆にみる祖霊信仰——熊本県天草の事例研究——

大戸 一昌 日向高鍋藩の文教政策

小川 秀郎 福澤諭吉の健康観

小沢 秀人 中世の遊行寺

川島 政行 豊臣政権における羽柴秀長の存在価値

川村 光 日本の対外意識——明治初期地理教科書から——

古池 利昌 「文明」の語義と使われ方

斉藤 智宏 関ヶ原合戦に見る石田三成 日本人の亜米利加観——福沢諭吉と内村鑑三を中心

坂本 真哉 日本に——

佐藤 秀也 郡内機業の生産構造

波井 正維 横浜市旭区の石仏

志村 久昭 釜無川の水害と信玄堤

城地 茂 江戸大絵図

鈴木 敦子 律令文書と中務省——詔と勅を中心に——

鈴木 泰寛 山形県の両墓制

高橋 正幸 宮沢賢治の理想的農民像

竹ヶ原浩司 西大寺伽藍配置の復元

田中 麻子 幕末における「誠」の一考察—新選組を中心に—

千葉 隆志 内村鑑三と武士道—武士道的キリスト教とは—

中沢 俊夫 児童向伝記の研究—福沢諭吉伝を中心に—

中村 友哉 生産調整下における搦の農業

西川 淳 文人としての実朝

布川 正宏 親鸞の思想における他力

長谷川 隆 河井継之助—幕末における藩政改革—

原田 浩 志賀直哉の作品にみる女性達

平澤 浩二 法然の回心と選択について

平山 剛 明智光秀の謀反

福見 紀子 三浦半島(愛媛県)における傾斜地農業地域

古屋 喜人 山梨県一宮町の複合扇状地における土地利用と水利

形態

星 宏幸 石田三成の人物像—その教養面から当時の文化との関係を探る—

松井 俊 中原中也の芸術観

元永 年彦 信長の「天下」

矢代 寿幸 内村鑑三の事業観—二宮尊徳から学んだもの—

中田恵津子 額田姫王

大綱 雅美 坂本龍馬の新国家構想

小藪 達也 戦後の日系アメリカ人の階層移動について

三宮 一郎 「食」と文明の相関関係

## 文明東アジア課程

和泉 達生 西漢初期における呂氏の禍と諸侯王国の問題について

て

後呂 和正 太平天国革命と農民闘争の関連について

海老名重徳 「秦始皇本紀」にみる始皇帝の内面的要素について

大原 康爾 中国新文化運動の知識人の分化

大村 寿雄 匈奴最盛期に至った騎馬民族と冒頓の活躍について

小沢 利広 太平道から黄巾の乱までの性格の変遷

小尾 一仁 中印国境紛争におけるマクマホン・ライン

亀田久美子 中国男性の纏足した女の足への愛着と執心

木原 精次 五四運動前の日中関係

小林 重和 陝甘寧辺区における農村革命

後藤 洋一 任那日本府の再検討—日本書紀を中心として—

佐藤 浩昭 教育者、陶行知、そのプラグマティズム理論分析と

南京試験郷村師範学校閉鎖後の政治的変貌

篠塚 峰宏 明代前半期における駅伝制度—軍站と良馬の確保

についての一考察—

白木 喜文 六世紀の加羅諸国—早岐連邦体制を中心にして—

鈴木 秀延 隋の滅亡原因についての一考察

高木 洋介 北洋海軍と丁汝昌

武田 邦彦 赤眉の乱についての一考察

中山 明夫 「史記」秦始皇本紀に見る始皇帝の行動とそれを巡

る周田の人物達の言動から推測される始皇帝の人物論について

永瀨 淳 後漢時代の宦官と社会についての一考察

滑川 玉江 孫基禎と日章旗抹消事件

野田 泉 前漢酷吏についての一考察——武帝期を中心に——

林 久美子 臉譜

平井 章 太極拳と体との関係についての一考察——陳家太極

拳と楊太極拳との比較——

福島 徹郎 日本留学時における魯迅の意識変化への一考察

古川 直人 現代中国における鉄道輸送——石炭輸送問題より——

細井 義郎 隋の大興城についての一考察——宇文愷を通しての

性格付け——

村松 徳仁 商鞅変法にみる中国古代帝国形成の諸条件

山本 克文 王莽の受禪にいての一考察

山本 浩子 妖怪を通して見る日中関係と国民性の違い、そして中国庶民の生活史

相川 晋也 清末における留日学生の増加と日本の対応について

勝田 明宏 古代中国における玉の性格——玉からみた周代の信仰と精神についての考察——

「金玉均暗殺事件」の状況とそれ以後の日本国内の

木呂場勇司 反応

重田 幸作 明末のカトリック伝道——マテオリッチの生涯——

中山 雅也 近代中国マンガ変遷の一考察

長坂 俊紀 新羅・花郎道——その国家発展・統一にはたした役割——

野島 順平 義和拳の乱の本質について

前田 嘉雄 中国の結婚について——一九五〇年度の婚姻法を中

心——

松島 三恵 文化大革命の遺産

村田 潤 日本と中国の貿易関係

吉田 信之 西域の幻術使い

平井 耕司 中ソ対立における国境紛争

石毛 克也 中国の映画政策

伊藤 裕次 魯迅が追い求めたもの

白倉 和夫 朝鮮植民地支配期における日鮮同祖論について

大竹 明子 康有為の教育観

大村 和富 樽井藤吉と『大東合邦論』

串田 圭 西安事件における楊虎城の一考察

小泉 仁美 防殺令賠償交渉時における日本国内での一般民衆の

煽り

古山 千砂 匏瓜に対する観念について

佐藤 潤子 朝鮮への唐辛子の伝来について

佐藤 裕子 文芸大衆化論争前後における茅盾の大衆観について

の考察

杉本萬里子 猿の民話・伝説から考える西遊記の構造について

高木清三郎 台湾米作農業における在来種から蓬菜種への転換過

程と影響

高橋龍士郎 林則徐の広東防衛、対英策について

田村 繁樹 樓蘭——漢代を中心として——

照井 慎 秦王政を彩った人々

永宮 宜浩 鄧茂七の乱についての考察

成田佳寿子 魯迅の女性観について

兵藤 玲子 中国に於ける唐以前の飲茶の歴史——薬効を中心とした考察——

星 雄一 吉田松陰の太平天国観——その影響について——

本田 勇人 匈奴における祭祀に関する一考察——北方遊牧民族との比較から——

宮野内圭二 陶淵明の人物像について

森 佳子 新婚姻法の問題点——第二条からの考察——

山口 純一 漢の高祖の組織力について——楚漢の勝因に於ける一考察——

池田 泉 バリ島細密画の宗教性

文明南アジア課程

青山 知代 『Apsamba-sutra』におけるカースト観

麻生 恭浩 インド仏教美術におけるヘレニズム文化の影響

大石 貴弘 独立後インドの指定カースト、指定部族に対する教育政策

大内 知行 ガンディーの非暴力主義について

大坪 和博 アショーカ王と聖徳太子——古代における政治指導者の比較——

大庭 正浩 ダルマーストトラにおけるアーシユラマ観とそれに続くマヌスムリテイにおけるアーシユラマ観

緒方 仁 南アジア水産業の現状と課題

小山 淳史 カウティルヤ「実利論」における国家

鈴木 一弘 インド独立と国民軍の歴史的役割

鈴木 雅人 イギリス支配とヒンドゥー教

藪田 玲子 インドにおける占星術の歴史と伝播——『宿曜経』にみる一二宮占星術を中心として——

竹見 義弘 マヌ法典における婚姻と家族関係

富澤 真敏 一九七〇年代のインドの新聞

中村 洋子 インド教育政策におけるベシック・エデュケーション

蛭川 文 モヘンジョ・ダロ、ハラッパーにみられる都市の生活

長谷川万弓 リグ・ヴェーダに見られる世界観と祭祀

平島 長生 クシャーナ時代の美術様式

本多 慶香 大日如来の一考察

望月 貴夫 インドの障害者について——インドの福祉を中心に——

山田 孝 初期アーリア人の社会——パンジャーブ地方侵入からドアーブ地方定着期における社会組織——

吉田 一郎 インド大反乱におけるバハードゥル・シャー二世

大場 栄 古代のインドにおける賤民

川合 一典 原始仏教の縁起説について

埴原 千鶴 インドシナ問題を考える

三浦 寛昭 インド村落社会におけるカースト制度——その排他性について——

島村 泰人 アンベードカルと仏教

文明西アジア課程

秋澤 宏樹 ウルグベグの人物像とサマルカンドの天文台

安斎 明定 一五世紀後半のユダヤ教徒ミレット——イスタンプルを中心に——

生沢 幸枝 イランにおけるシーア派、一二代イマーム Mahdi の隠れと再来

伊藤 厚 イスラムの家族法について

稲垣 仁之 スルタン・ガリエフの思想

岩重健一郎 エジプトにおける・「アラブ社会主義」

北砂 明彦 バイブ教徒の反乱

桑田 義徳 イラン革命における経済的起源——シャールの五ヶ年計画の目標と結末——

越田 正美 オシリス神話にみられる復活・再生について

小林 昭子 古代エジプトにおける書記の奨励

坂田 克浩 イラン立憲革命におけるウラマーの役割

佐久間礼子 イスラム神秘主義詩人 Ibn al-Farid (A. D. 1181—

(1235年)の世界

佐藤 智子 イル・ハーーン国におけるイラン人官僚ラシード・ウッディーン

嶋森 学 シャー・イスマーイール時代のワキール

鈴木 明美 イラン立憲革命においてウラマーの果たした役割について

鈴木 宏子 アラブ遊牧社会の近代化

鈴木ゆかり アラブの風土と人間——ジャーヒリーヤ詩にみる自然観——

高橋 浩一 Malkom Khan の政治活動及び思想についての一考察

田村かおる ターズィエーの歴史

土田 由佳 ガザリーの神の愛について

津山しのぶ アフマド・カスラウイーの思想について——ペルシア古典詩批判を中心として——

戸田 泰隆 二〇世紀イランにおける女性権利運動についての一考察

中村 嘉子 一三一—一五世紀初期にかけてのトルコ装飾タイルの変遷

長場 理興 一九六七年以上のイスラエル占領下におけるヨルダン川西岸の状況

新津 嘉彦 キュロス二世——その軌跡を追って——

藤井 正孝 ハイレッディン・バルバロスとオスマン帝国海軍の

成立について

宮田 正実 古代エジプトの暦について

宮原 弘美 ぶどう唐草文様の東漸と変化について

矢口 睦美 古代エジプトにおける新王国の軍隊

横山 光紀 一八世紀エジプトの民衆運動とウラマー

和田 好正 エジプト先王朝時代ナカダエ文化の一考察

伊藤 達郎 プワイフ朝におけるイランとトルコ人についての一

考察

伊藤 靖 ジャマール・アッディーン・アルアフガーニーの思想について

沖野 孝之 クーチェク・ハーンの生涯

山内さと子 八世紀から一三世紀における後ウマイヤ朝の商業について

吉崎 光浩 ピリー・レイスの生涯と功績

岩田 正邦 イラン立憲革命における大商人の位置

文明東ヨーロッパ課程

青木 祥子 イコノクラスムと東西両世界の対立

青木 悟 ソヴェエト政府成立期におけるポリシエヴィキの活動

飯田 努 スラヴ主義と西欧主義の共同体論争について——ゲルツェンの農民社会主義の考察——

池辺 昇 宗教の違いにおけるソ連と日本

伊藤 和正 フルンチョフの一〇年——農業外交党内構造問題におけるフルンチョフの失策——

伊藤喜美子 ロシア革命期におけるバレンエについて

上田 博之 ロシア語における完了体動詞と不完了動詞の比較

——プーシキン作・イヴァン・ペトロヴィチ・ペー

ールキン物語「その一発」(БАГЦПЕА)の中における過去形動詞の体の用法——

内田 信吾 ソビエト民話に見る教訓

大沢 明美 ポーランドカトリックについて——社会主義下の宗教——

岡 幸伸 ナロードニキ運動における「土地と自由」結社について

岡沢佳代子 アンドレッチの人と文学——「ドリナの橋」をめぐって——

片桐光太郎 チトー大統領——対ソ連政策——

加藤 修 ピョートル大帝のペテルブルグの建設

北沢 淳子 ニューゴスラヴィアに於ける民族問題——アルバニア少数民族について——

久留 一郎 ピオネール組織に対するボーイスカウトの影響についての一考察

酒井 孝博 ゴムウカニズムにおけるポーランド社会と国民の期待

佐藤 直美 エリ・エヌ・トルストイの教育思想について



佐藤 緑 ソビエトの義務教育における留年制度

佐藤 裕司 トロツキー——現代ソ連との接点について——

白川 英夫 モンゴルの東欧遠征

杉原 千晶 ショパンの作品背景にあるポーランド

関口 朋宏 コサック——征服と反乱に生きた自由戦士たち——

高須 千代 セルビアの諺

鷹栖 信夫 「イコン」と「イコノクラスム」

竹内 一代 オスマントルコ支配下のバルカン社会とその独立闘

争

塚本 由香 ブルガリアの農業

坪谷喜美子 一九世紀におけるロシアの対日政策について——ロ

中川 裕章 ロシア正教会とロシア革命——ロシア正教会と革命

西村 誠 政策の共存過程——

東欧諸国の自由化運動とソビエトの対応——とくに

チエコ事件をめぐって——

野笹 和彦 中世セルビア帝国とセルビア人

原田 論 中世ロシアにおけるアンドレイ・ルブリョフの独

自性

半田 裕主 マリア・テレジアについての一考察

山元 文字 ハプスブルグ帝国における宗教改革運動とそれが帝

古厩 弘和 国に及ぼした影響

フルシチョフ政権下における農業政策——特に処女

地開拓を中心に——

松任谷篤子 ガルシンの文学

松並 裕子 スラヴ民族の神話

森田 牧子 ブルガリアと2つの条約

山田 信一 血の日曜日事件に見る民衆の動向——ガボンについ

ての一考察——

山本真紀子 ブルガリア民族解放運動

米田 和代 エカテリーナII世の領土拡張政策の影響——ポーラ

ンド分割——

和田 弘子 日本におけるチエーホフ文学受容の変遷

鈴木 信行 クロパトキンと日露戦争

唐沢 正紀 イコノクラスムの原因と特色について

倉知 徳幸 ブルガリア農業と農工コンプレックス

文明西ヨーロッパ課程

浅川 明伸 デカルトと方法叙説について

飯塚 吉博 現代企業の軍事組織活用論

井野 幸枝 キリスト教迫害における皇帝ディオクレティアヌス

大森由加利 マザーグースの奇妙な世界

奥津 雅恵 不思議な版画家M・C・エッシャーの正体

尾郷さくよ ターザンからスーパーマンへ——大衆が作ったアメ

リカのヒーロー——

加藤 淳 西洋における死の思想について

金田 弘正 食と文化——ヨーロッパと日本の比較——

木村 徹 「異邦人」における一考察（ヘルムソーは異邦人か）

願 香保子 娼婦とはいかなるものであったか

小菅 啓嗣 古代ギリシア社会における神託と政治

後藤 慎二 モータースポーツにみる比較文明論——レースが我々にもたらすもの——

佐藤三恵子 ビカソの女性像——愛人の肖像画——

塩沢 一美 なぜヒトラーはユダヤ人を殺さねばならなかったか

島崎はるみ 日・欧「食事文化」を考える

下川智佳代 『パパラギ』と『ガリバー旅行記』から見た人間らしさととは社会とは

蘇 乙美 ミケランジェロにおけるキリスト教の存在について

田中 栄一 アイルランド問題について

土橋 敏郎 ホップスとロックにおける政治社会構築の理論とその相違

中村 隆子 我が国における生命科学に対する倫理観について

永井 順子 貴婦人崇拜と神秘主義——一・二・三世紀の西欧の騎士と神秘主義の女性との愛の比較——

長塚 洋子 キリスト教化によるゲルマン民族の宗教観の変遷とその影響

難波美由紀 象徴としての猫

長谷川朋子 古代ギリシアにおける女性の地位——ギリシア喜劇を中心として——

藤井 誠司 たばこ嗜好品として文化として——パッケージから文化が見える——

三浦 晃靖 『テアイテトス』の感覚論

三杉 幸司 人間にとつての緑——東西の比較——

見元可奈子 住いにおける「ゆとり」の復元

山本 孝 学校教育における体罰の是非

横内 由美 一五世紀キリスト教社会におけるジャンヌ・ダルクの役割

吉田 昌則 ツアラトウストラの魂

渡辺 稔 英国経済の衰退とサッチャー政策の意義

大場 紀子 C・S・ルイスのキリスト教思想について

青木 聡 ミケランジェロにみる人体美

鈴木 英樹 ワインの流れそしてイメージ

山崎 孝二 イタリア統一の思想とその時代背景——マキャベリの君主論における——

伊部 光昭 西ドイツにおける日本車の進出

阿部ひろみ メルヘンとグリム童話その現実と背景

五十嵐郁夫 一九世紀フランスロマン主義時代における幸福の追求——スタンダールの作品を中心として——

石踊 毅浩 現代の推移と将来

井田 裕 Johann Sebastian Bachと宗教音楽

井上 晶子 ヴィーナスの起源——アフロディーテーとアドニス

をめぐる神話——

大野 一男 歴史上の十字架(イエス)と『十字架』(キリスト)

岡田 恭子 「ヴィーナス」を求めて

小川 義博 自然支配の行きづまりによる問題とこれからの自然

観

貝塚 昭彦 現代におけるスポーツ・アマチュアリズム

金山 昭彦 古代ギリシアにおける象徴としての動物

久保田俊久 今、話題のニューメディアCATVの例にみる

小泉 隆彦 日本の教育・イギリスの教育——大学のあり方を中心に——

古作 聡子 イエスの母マリアのイメージ——福音書における考察——

小嶋 正 「性」揺れ動く日本・西欧

小林 昌美 スキーの文明とリゾート

佐藤 泰生 ナポレオンの戦いと孫子の兵法——その現代的指針——

佐藤 寛 現代社会における人間の危機——その克服の可能性——

周藤 秀之 ファッションの果たす役割

杉山 守俊 F・ペーコンの功績とその生涯

竹重 俊二 北アイルランド紛争におけるナショナリズムとユニオニズム

月岡佐恵子 都市にあらわれる文化——江戸と西欧都市を比較して——

富田 智 日本の消費者と輸入米——日本人は輸入米を受け入れるか——

中村奈保子 女神アテーナーの性格——知恵と戦さと工芸——

永江 陽子 アニエリスム芸術の世界

永田 正人 ボードレールに見る文明論

波 徹 SFとは何か——その歴史と可能性——

沼田 康治 交響詩『海』からみるドビュッシーの印象的音楽

萩原 孝一 ルターと音楽

槇野 国恵 中世におけるイエス像——カロリング朝からゴシックまで——

松村 俊一 カエサルのカリア征服における戦争の正当化——『ガリア戦記』を中心として——

松本 典子 ローマ時代における女性の生き方について

真鍋 和弘 フランス一六世紀アンリ4世下の政治と社会について

水谷 祐子 アインシュタインに於ける平和理論

初山真智子 体外授精・胚移植の動向——医療関係雑誌からみた一考察——

両角 浩人 外国人スパイ・探偵小説作家の見たTOKYO

山岸 洋 フランツェカフカの「審判」における権力と生の問題

山口 貴義 中世ヨーロッパにおける自然と人間

横田 卓 ファウストと時代

吉田 裕之 共和主義者ベートーヴェンと彼の交響曲について

依田 勤 ナポレオンのエジプト遠征

工藤 康淳 アメリカ黒人音楽について